

近世儒学関係諸文庫について

柴田, 篤

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 中国哲学史

<https://hdl.handle.net/2324/10625>

出版情報 : 貴重文物講習会. 9, 2008-06-20. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

2008年6月20日(金)

九州大学附属図書館 貴重文物講習会(平成20年度 第3回)資料

「近世儒学関係諸文庫について」

文学部 柴田 篤

一. 近世儒学関係書籍と九州大学附属図書館

1, 九州大学文系合同図書館「中国学図書分類表」(文学部一層)

「理学 51」 性理学、朱子学、道学、宋学、宋明学、理気心性の学、宋明儒学思想
理学(朱子学)と心学(陽明学)、中国近世儒学、江戸儒学、朝鮮儒学
『晦庵先生朱文公文集』、『朱子語類大全』、『朱子実記』(貴)、『河南程子遺書』(貴)、
『象山全集』、『慈湖先生遺書』、『王文成公全書』、『李氏焚書』(貴)、『正誼堂全書』、
『李退溪先生文集』、『垂加文集』(山崎闇齋)、『四部書』(久米訂齋)

2, 九州大学儒学関係特殊文庫

- (1) 「碩水文庫」(中央館保存書庫) 1933、『碩水文庫目録』(1934)
- (2) 「武内文庫」(文学部書庫、混配) 1955、文学部図書館分類カード
- (3) 「益田(古峯)文庫」(六本松分館、混配) 1966、『益田文庫分類目録』(手書)
- (4) 「坐春風文庫」(文学部書庫) 1960、『坐春風文庫 目録 及び注』(1969)
- (5) 「崎門文庫」(文学部書庫) 1981、『崎門文庫目録』(手書、1985)
- (6) 「高瀬文庫」(文学部書庫、現中央館) 1983、『高瀬文庫目録』(手書、1985)
- (7) 「吉村文庫」(文学部貴重書庫) 1985、『吉村家文庫目録』(1986)

二. 楠本正継教授とその家学

1, 楠本正継(1896～1963)

長崎県東彼杵郡針尾村(現佐世保市)に生まれる(明治29年12月29日)
東京帝国大学文学部支那哲学科卒業(1922)
九州帝国大学法文学部中国哲学史講座教授(1927～1960)
第11代九州帝国大学附属図書館長(1944,5～1946,6)
文部省科学研究費助成費・総合研究「九州儒学思想の研究」(1955～56年度)
ロックフェラー財団研究助成費「宋明思想の研究」(1956～60)
『宋明時代儒学思想の研究』(廣池学園出版部、1963)
『楠本正継先生 中国哲学研究』(國土館大學附属図書館、1975)
研究主題 ① 中国古代思想(周易、老子、莊子、孫子)
② 宋代理学思想(程明道、程伊川、朱晦庵)
③ 宋明心学思想(陸象山、王陽明)
④ 江戸儒学思想(日本陽明学、熊本実学思想)
⑤ 中国思想・宋明思想を貫く問題

2, 楠本家三代

- 楠本端山 (1828 ~ 1883) 名は後覚、「楠本文庫」(長崎図書館)
楠本碩水 (1832 ~ 1916) 名は孚嘉、「碩水文庫」(九州大学)
楠本海山 (1873 ~ 1921) 名は正翼、端山の長子、「楠本文庫」(長崎図書館)
楠本正継 (1896 ~ 1963) 号は剛堂、海山の長子、「楠本文庫」(國土館大學)

3, 楠本家旧蔵書 収蔵文庫並目録

- (1) 「碩水文庫」(九州大学附属図書館中央図書館) 1933年(昭和8)購入
『碩水文庫目録』(1934)
(2) 「楠本文庫」(長崎県立長崎図書館) 1975年(昭和39)購入
『郷土資料目録一増加補遺の部・I』(1975)
(3) 「楠本文庫」(國土館大學附属図書館) 1965年(昭和40)寄贈
『楠本文庫漢籍目録』(1973)

三. 近世儒学関係貴重図書

1, 宋明儒学関係漢籍

- (1) 『日本九州大学文学部書庫漢籍目録』(周彦文著、台湾・文史出版社、1995)
(文学部書庫、貴重書庫、坐春風文庫、崎門文庫、高瀬文庫)
(2) 『日本九州大学文学部書庫明版図録』(周彦文著、台湾・文史出版社、1996)
(文学部書庫、貴重書庫、坐春風文庫、高瀬文庫)
(3) 「中国近世思想関係貴重漢籍(展覧第3回)」(荒木見悟著)
(「図書館情報」117号、1980)
① 『碩水遺書』 楠本碩水撰、12巻、5冊、1918刊
② 『伝習録欄外書』 佐藤一斎撰、楠本碩水写、3巻3冊
③ 『楊龜山先生集』 楊時撰、42巻10冊、万曆19年(1591)刊
④ 『近思録集解』 14巻4冊、正徳14年(1519)、朝鮮鳳城精舍刊
⑤ 『慈湖先生遺書』 楊簡撰、14巻10冊、嘉靖4年(1525)刊
⑥ 『性理大全』 胡広等奉勅撰、70巻20冊、嘉靖32年(1553)刊
⑦ 『遜志齋集』 方孝孺撰、24巻序目1巻附録1巻15冊、正徳15年(1520)刊
⑧ 『大慧禪師書問』 大慧宗杲撰、1巻1冊、万曆45年(1617)刊
⑨ 『道一編』 程敏政編、6巻2冊、弘治刊
⑩ 『金華正学編』 趙鶴編、10巻2冊、万曆7年刊
⑪ 『高子遺書』 高攀龍撰、12巻附録1巻8冊、崇禎4年刊
⑫ 『羅近溪全集』 羅汝芳撰、30巻24冊、万曆刊
⑬ 『焚書』 李贄撰、6巻4冊、万曆刊
⑭ 『李氏説書』 李贄編、林兆恩閱、9巻4冊、明刊
(4) 朝鮮古写本
『朱子語類』 140巻(徽州刊朝鮮古写本)

2, 江戸儒学関係漢籍

- (1) 江戸期儒学者旧蔵書
- (2) 楠本碩水自筆写本
- (3) 崎門写本

3, 九州大学研究者 編集監修解題出版 近世儒学思想関係漢籍

- (1) 『朱子語類』岡田武彦 跋 (中文出版社、正中書局、1962、1970)
- (2) 『和刻本 朱子語類大全』岡田武彦 解題 (中文出版社)
- (3) 『和刻影印 近世漢籍叢刊 思想編』岡田武彦主編 (中文出版社、1972)
- (4) 『和刻影印 近世漢籍叢刊 思想続編』岡田武彦・荒木見悟主編 (中文出版社、1975)
- (5) 『和刻影印 近世漢籍叢刊 思想三編』岡田武彦・荒木見悟主編 (中文出版社、1977)
- (6) 『和刻影印 近世漢籍叢刊 思想四編』岡田武彦・荒木見悟主編 (中文出版社、1984)
- (7) 『朝鮮古写徽州本朱子語類』岡田武彦 解題 (中文出版社、1982)
- (8) 『龜井南冥昭陽全集』荒木見悟・岡村繁 等編 (葦書房、1978)
- (9) 『楠本端山碩水全集』岡田武彦・荒木見悟 等編 (葦書房、1980)
- (10) 『劉子全書遺編続編』岡田武彦 解題 (中文出版社)

四. 崎門写本について

1, 山崎闇斎と崎門三傑

山崎闇斎 (1618 ~ 1682)

佐藤直方 (1650 ~ 1719)、浅見綱斎 (1652 ~ 1711)、三宅尚斎 (1662 ~ 1741)

2, 崎門文献

- (1) 『日本道学渊源録』大塚観瀾編、楠本碩水増補、1900序、1934刊
- (2) 『崎門学脈系譜』楠本碩水編、1891序、1940刊
- (3) 『大倉精神文化研究所所蔵 崎門学派著作文献解題』(『阿部隆一遺稿集』第三卷)

3, 崎門写本主要所蔵機関

- (1) 東北大学図書館 (狩野文庫)
- (2) 新発田市立図書館
- (3) 千葉県文書館 (蕪木文庫)
- (4) 国会図書館
- (5) 慶応大学斯道文庫
- (6) 國士館大學附属図書館 (楠本文庫)
- (7) 名古屋市蓬左文庫
- (8) 桑名市立図書館
- (9) 小浜市立図書館 (酒井家文庫)
- (10) 高知県立図書館
- (11) 九州大学附属図書館 (碩水文庫・坐春風文庫)
- (12) 長崎県立長崎図書館 (楠本文庫)
- (13) 高鍋市立高鍋図書館 (明倫堂文庫)

4, 「碩水文庫」収蔵写本

- ①『易学啓蒙師説』3冊（浅見綱斎述）（『碩水文庫目録』4頁）
・『楠本文庫漢籍目録』47頁
- ②『易学啓蒙師説』2冊（若林強斎述）（『碩水文庫目録』4頁）
・『酒井家文庫綜合目録』323頁
- ③『敬斎箴筆記』1冊（三宅尚斎述）（『碩水文庫目録』19頁）
・『楠本文庫漢籍目録』50頁
- ④『綱斎先生論語筆記』2冊（浅見綱斎述）（『碩水文庫目録』20頁）
・『楠本文庫漢籍目録』49頁（『論語師説』）
・『酒井家文庫目録』330頁（『論語筆記』）
・同上330頁（『論語師説』）
・同上330頁（『論語師説』若林強斎講）

五. 今後の課題

- 1, 諸文庫の調査
- 2, 諸文庫個別目録（冊子）の作成
- 3, 諸文庫収蔵書籍の複写
- 4, 諸文庫収蔵書籍の個別研究
- 5, 諸文庫収蔵書籍の総合的研究（含総合目録作成）
- 6, 諸文庫収蔵書籍の閲覧利用

【参考文献】

- (1) 楠本正継「碩水文庫に就て」（『碩水文庫目録』1934）
- (2) 岡田武彦「碩水文庫雑感」（『図書館情報』32号、1968）
- (3) 山室三良「坐春風文庫由来」（『坐春風文庫 目録 及び注』、1969）
- (4) 荒木見悟「中国近世思想関係貴重漢籍（展覧第3回）」
（『図書館情報』117号、1980）
- (5) 中央図書館「第三回中央図書館貴重文物展覧目録」（『大学広報』370号、1980）
- (6) 柴田篤「文学部所蔵「武内文庫」の謎を追って—楠本正継図書館長とその時代—」
（『図書館情報』210号、2005）
- (7) 柴田篤「楠本家三代の家学と退溪学」（『中国哲学論集』第31・32合併号、2006）
- (8) 柴田篤「碩水文庫余滴—楠本正継教授と九州大学附属図書館—」
（『中国哲学論集』第33号、2007）
- (9) 柴田篤「楠本正継博士覚書」（『名古屋大学中国哲学論集』第6号、2007）
- (10) 柴田篤「益田古峯覚書—九州大学「益田文庫」の旧蔵者—」
（『中国哲学論集』第34号、2008 予定）
- (11) 『九州大学附属図書館漢籍目録』（九州大学附属図書館、1995）
（保存書庫、貴重書庫、碩水文庫、萩野文庫、石崎文庫、支子文庫）
- (12) 『九州大学附属図書館教養部分館漢籍目録』（附属図書館教養部分館、1971）
（六本松分館貴重書庫、古峯文庫）

嘉靖三十二年(1553)刊。七十卷二十冊。胡広等奉勅撰。明代における科学試の基準テキストに、朱子学系統の註釈書を用いる慣例は、太祖の洪武初年から始まるのであるが、成祖の永楽十三年(1415)、三大全(五經大全・四書大全・性理大全)を公布することにより、朱子学の国教化は決定的となる。三大全のできばえについては、胡広をはじめ、その編集にたずさわった学者の見識が低かったため、後世批判の声絶えず、朱子学者の中にも、これが原朱子学の生気をそぐ起因となったとの嘆声をもらすものがあるほどであるが、ともかくこれが明一代の国定教科書として果たした役割は、相応に評価しなければなるまい。従って三大全は、明代においてはたびたび刊行されたはずであるが現存する版本は意外に少ない。ここに展示したのは性理大全であるが、これは宋代の朱子学系の学者百二十家の説を集め、「太極図説」以下、主要な道学書を収めるとともに、卷二十六以下は、諸儒の語を採集して、理気・鬼神・性理・道統・諸儒・学・諸子・歴代・君道・治道・詩・文の十二門に分類し、道学修得のための基本的要項を示している。

因みに性理大全は、わが国でも、承応二年(1653)に刊行されている。

楊龜山先生集

万曆十九年(1591)刊。四十二卷十冊。楊龜山(1053 - 1135)、名は時、あざなは中立、龜山は号である。南劍州将楽(福建)の人。熙寧九年(1076)進士に合格するが、官途に意なく、洛陽の程明道・程伊川兄弟について学をきわめ、程門の俊傑と称され、兩方に赴任せんとするや、程子は、「我が道南せり」とその前途に望みを囑したという。その講学の範囲は、江蘇・浙江を主とするが、その三伝の弟子に朱子(1130 - 1200)が出、儒学を大成し、学統を定めたために、龜山の中国思想史上の地位はきわめて高くなる。特に、明の万曆年間に新朱子学を標榜した東林学派が、無錫(江蘇)の龜山書院址に東林書院を興し、多くの人材を養成したために、龜山の名は一層世の注目するところとなった。

龜山集は、三十五巻本として編纂された旧版が早く散逸し、明の弘治十八年(1505)、心性の錬磨に益あるもののみを集めた十六巻本が刊行され、続いて正徳十二年(1517)三十六巻本も出現するが、万曆十九年に至り、漸く最も完備した四十二巻本が、将楽知県林熙春の手により発刊されるのである。以後、清朝の順治本・康熙本等はすべてこれに依拠している。

李氏説書

明刊本。九卷四冊。本書は、初丁に「泉州卓吾李載賛編輯」「甯田龍江林兆恩闕著」と双行に記されているように、李卓吾の編集したものに、林兆恩が校閲の筆を加えたものかと推定される。「説書」とは、巻頭にかかげられた如真道人の序文に、「夫れ書を説くとは、何の書ぞや。孔會思孟の書を説くなり」とのべられているように、論語・大学・中庸・孟子の四書について、その内容を發揮したものである。その解釈を微細に検討してみると、卓吾と兆恩の論説が入りまじっていることは、疑うべくもない。卓吾が友人焦竑に与えた書簡によれば、彼自身に李氏説書と題する著書が用意されていたことは明らかであるが、今本は恐らくそれと兆恩の思想とを合糅することによって成立したのであろう。それが『李氏説書』の書名をそのまま残したのは、卓吾の盛名とともに、序文の筆者如真道人のはからいによるものかと推定される。如真道人とは、当時金陵(南京)で活躍した李登(あざなは士龍)のことであり、卓吾と多年にわたり交渉をもった人物だからである。卓吾と兆恩とは、必ずしもその思想傾向が完全に一致するわけではないが、明末における人間解放運動の波にのった点では共通性があり、それがこうした異色ある四書註釈書の編纂を可能にしたのであろう。

本書は近年、中国において一・二部発見されたようであるが、わが国では、九大蔵本が唯一のものではないかと思われる。

徽州所刊寶祐二年再校正

朱子語類百四十卷

語類從類朱子語類百四十卷之近世徽州文刊之
徽本與錢謙益所刊本之異同
徽本與錢謙益所刊本之異同

朱子語類百四十卷



孔孟之書至濂洛講說而明
濂洛之書得朱子講說而粹
朱子之書恭遇
皇上表章而益尊顯於天下
夫道固未易以言語求捨言
語亦無以求道特儒先之言
散在方策浩若煙海學者不

表紙解説

朝鮮古鈔本『朱子語類』百四十卷（文学部所蔵貴重書）

この朝鮮古鈔本は天下の孤本である。現在流布している『朱子語類』百四十卷は南宋の咸淳六年（一二七〇）に黎靖徳が、それまで刊行された『語録』四録、『語類』三類を統合整理して刊刻したものを原本とする。本鈔本は黎氏以前に属す所謂「徽類」の系統を引く「語類」の鈔本である。

本書は文学部中国哲学史講座の初代教授で大正十五年赴任、昭和三十五年定年退官された楠本正継先生の所蔵本であったが、昭和三十七年に文学部の所蔵となった。

楠本先生によれば、この写本は元来朝鮮伝来らしく、かつて尾張藩の官庫に蔵されていたもので、のちに書肆文光堂に売り渡されたことが、同藩藩儒の細野要齋の手記に見え、かつ要齋は官庫の書目には唐の写本とあつたが、これを疑い「此本紙品筆勢並朝鮮人写徽州本者也」と識したと述べ、徽州本の系統らしいとされた。

上掲の「孔孟之書」ではじまる呂午の序の冊首天に「拂」の円印がある。藤本幸夫氏の『朝鮮版『朱子語類』攷』によると、「この『拂』印は、明治初年尾張徳川家より払い出された

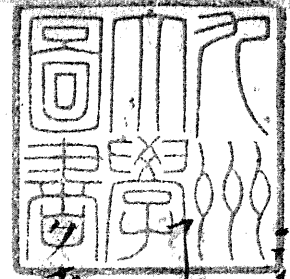
時のもので」とあると言う。楠本先生は幕末維新の朱子学者楠本端山の令孫で、楠本家三代にわたる宋明学関係書籍の蒐集中に本書が収蔵されたものと思われる。

本書の大きさは縦三〇・〇×横一八・四（センチ以下同）、木版朱刷りの匡廓を有し、四周双辺無界、匡廓内縦二二・二×横一四・九、行格は每半葉一〇行、行二一―三字、毎条首行以下低一格、版心に木刻の「朱子語類卷」が押しであり、その下に「幾幾」と墨書するが、卷十四、卷十五の版心には、そのすぐ下方に「宙」という字が墨書され、以下卷十六から卷百四十までに「洪」「荒」「張」「寒」「来」「暑」「往」「餘」「成」「歳」「律」「呂」「麗」「水」「玉」「昆」「岡」「劍」「号」という字の墨書が見られる。

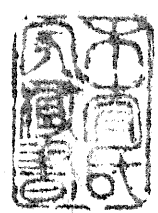
前記藤本氏の論文では、本書は一六世紀鈔本であろうと指摘されているが、本書四二冊中第三八冊（卷一一八―一二一）には朱吾弼の万曆刊本による補鈔の部分がある。万曆刊本は万曆三十二年（一六〇四）刊刻されており、本書が全体として整えられたのは十七世紀であろうと推測される。黎氏以前の諸本のうち、完全ではないが、このようにまとまった鈔本は今日他に類を見ない。天下の孤本と称すべき貴重書である。

（教養部教授 福田 殖）

35. 9. 30
ア263879



楠本正繼寄贈



接見先生小學講談ノ次序ニ諸生ニ謂テ曰大抵此學尚ト云カラハ誰モ知

誰モスル一誰カスルモ同シトヨ叔漢唐以來博文ナモノモ文章ヨクカ

者モ亦記誦ニスグレテ達人モアリ歴々トシテ是ホドアリソレカスルトシ

ト云テ別ノ一テモナイ同ヤウニ書ヲ讀ミ同シヤウニ隨分精ク磨イテ秋ノ

如ク義理ヲ見ヤウトスル一ハ殘ル処ナク漢唐以來誠ニ幾千萬人ト云數

レシメズ何トシテアノ歴々ノ學者者モ真圓ナ學者ラニラヌト云ハ先初此子ノ合

意ノエカヌ一テハナイ歟スレバナニテアヲフトソコニハカクノル答ノ一ツ其合

意カチアテハ何ホト書ヲ讀テモバツタリト聖此子ヲ知ラヌト云レテカラハ延

刻ハナラヌ安イ一朱子以來ノ此學者秋ノ如クトキクトアルヤレモサア是

ゾ朱子ノ此學ノ統ヲ合意シタト云ハ指ヲ折ラスルハカリゾ此旨ヲレラ

は し が き

崎門学派に関する研究は従来必ずしも乏しいとは言へぬ。併しその大部分は極めて限られた資料に頼つてゐる。従つて同学派の全貌を根本から尽し得ぬことは言ふまでもない。それには理由があつた。崎門学派は師弟の間の講義口授を重んじ、その講述の筆録を極めて丹念に行ふ伝統があつた。梓に上ずのは大ていはその講義の際のテキストとして使用する教科書であつて、その詳細な考説は講述の間に下された。宋学の風にならつて「朱子語類」の様な語類に、重きを置き、所謂ソ式の独得なスタイルを伝襲してゐる。かうした類のうち、重要なものでも版になつたものは稀れで、大部分は写本で通行してゐる。口述を弟子が筆録したものを師が校閲して加筆訂正した言はば証本と言ふべきものがある。従つてこの学派の研究は、刊本にのみ頼るとするならば、極めて不十分であることは自明である。

明治後新に活字に翻印されたものは江戸期の板本の極く一部である。写本のうち翻刻されたものに至つては更に寥々たるものである。有名な浅見綱斎を例にとつて見ても、未だに全集は刊行されてゐない。明治後の翻刻も「清猷遺言」の様のある一部のものは度々版種を重ねたが、他は顧みられない。綱斎の生々とした真面目を發揮してゐる重要な講義筆記や論説は依然として未刊のまゝである。同著作のうち、いかに板本、活版本が少いかは後に記すこの目録を見ただけでも容易にわかり、且つ一驚するであらう。

深くこの方面の研究調査にふみ入りうとする者が、先づ当惑するのは文献である。写本であるから、今となつては何処にでもあるといふわけにいかない。即座に手に入らぬ。また何処かで幸に入手したとしても、写本であるから魯魚の誤りは免れない。一本でよしとして安んずるわけにゆかぬ。幾本かを比較校合せねば十分ではない。先づその本が何処に蔵されてゐるか、その所在を探さねばならぬ。次にその本の系統と性格の書誌学上の検討を下さねばならぬ。残念ながら現在の学界の情況はかゝる段階にある。

またこの確実な基礎調査が成就してゐないのである。これは敢て崎門学派の場合に限らぬ。五十歩百歩の差違はあつても、日本思想史の分野ではまだコンパスなしに航海する様な段階であると称しても、強ち極論ではない。高遠な研究調査どころか、その前にその地盤の地ならし工作が成つてゐないのである。しっかりした地盤の上に立たぬ建築では砂上の樓閣になる。これで痛痒を感じないのは、手近な不完全な狭い資料で空論してゐる様なものである。餘程不勉強な安易な所に安んじてゐるのである。日本の学問は底が浅いと言はれても、この点では返す言葉がなからう。崎門学派の研究も、他に比して、この学派の性格上、今最初にせねばならぬのは、現存文献の書誌学上の調査、書目の作成である。各地各文庫の架蔵本の所在とその書誌が明かになり、次いでそれ等を相互に比較校合すれば、始めてよいテキストが作成できる。従来は折角犠牲を払つて刊行されても、校合が不十分なために學術上使用に耐えないものがあつた。これ程の浪費はない。現今の出版界ではかうした過去の先哲著作の翻印が極めて成就し難い情勢にある。従つて当分刊行は理想であつて、仮令その目標に達せずとも、書目が完備してをれば、一応研究者の要望に応ずるとはできる。緊急になさねばならぬことは書目の編纂である。此は一人ではできぬ。広く全国の同学者の協力共同作業を俟たなくては不可能である。この縁の下の力持、地味な作業をもつて研究者は相互に公平な地盤から出発できる。

凡 例

一、著録図書は本研究所蔵本のうち、江戸期の写本・刊本で、明治後の活版本類は一切省略した。但し写本・板本では一部収録したものもある。

一、配列は、撰者名を標目とし、その五十音順による。その標目の下には、自著のみならず、編纂書、口授の聞書、当該者の書入本、当人についての関係文献も含めた。

一、標目人名は、最も通行する号を以てし、下に名、字、学統、歿年等を注記した。

一、見出しの書名は原則として内題により、その下に巻数、著編者（口述書の場合は筆記者、標目者が著編者の場合は省略）、刊年刊行者、書享年書享年、丁数、形状、冊数の順で記した。丁数は写乃至刊の次に括弧に入れてある。但し、二冊以上は丁数を省略。本の大きさは、大（美濃判）、半（半紙判）、中（美濃半載）、小（半紙半載）、特大、特小の略号を使用。半二冊は半紙判二冊の意味。書名上の数字は本書目著録書の通し番号、解題記述は一切この番号を使用する。

一、写本で筆写者筆写年の不明のものは、単に写としてある、明記しないものは殆ど江戸中期後、大部分後期の筆写にかゝると看做してよい。

一、解題はなるべく簡明を期して、内容が書名から容易に推測できるもの、周知のもの、刊本、明治後の活版になったもの、全集叢書所収のものに関しては、多くは内容の解説を省略した。明治後の翻刻の有無は注記した。内容の解説も私見に落ちることを避け、なるべく序・跋・奥書をそのまま全部乃至一部を摘録して、それによって内容を推察理解できる様に努めた。従って解説の繁簡はその本により、形式的な統一を期してゐない。比較的に知られてゐない本には解題を詳しくした。

一、著作・口義等の成立年代を示すやうなものは洩らさず注記するやうに力めた。奥書・讖語等の文の段落や改行等については支障ない限り一々明記してゐない。漢文の引用は返点句読点のあるものは原文の通りで改めないが、送仮名堅点は、印刷の都合上省いた。

一、本文は明記のない限り、この学派の習慣として、概ね片仮名交り和文である。

一、解題の末尾には、括弧に入れて本研究所図書館の函架番号を附した。Hはとつてゐるのは全て服部氏旧蔵本、へへとあるのは本研究所が作成した影写本である。

一、各標目に属する図書の解説の最後に、「参照」としてその下にアラビア数字の番号があるのは、著・編・筆写・書入・序・跋の上でその標目当該者の関係文献がその番号図書にも含まれてゐることを示す。

本調査は昭和廿九年度慶応義塾学事振興資金の研究補助による筆者の「崎門学派研究」の一端で、記して感謝の意を表する。（昭和卅年臘月脱稿昭和卅二年正月加筆）

崎門学派著作文献解題

阿佐美彊斎 伝未詳 蟹養斎門人

1 学的 寛延三年写(自筆)(四丁) 半一冊

書簡を以て、学問の仕方・心得について記し、師養斎に呈せるもの。末に、「寛延三庚午正月十八日 阿佐美彊斎識」と。次に左の養斎自筆の跋文あり。

此約著明親切、可以見阿佐美氏深用心于切磋之間矣、若能守此、無少違背、則其進德也、可計日而待也 庚午正月廿三日 養斎(印) (H13-1)

15 淺見先生小学大意講義 写 半五冊

文中の日附より見るに、三月某日より十一月廿三日に至る講義の筆記。「敬身第三」の部全体と第三冊目初一葉を欠く。第一冊に「小学六藝口義」の仮名筆記を収む。次の奥書の幸和は吉見幸和である。

右 淺見綱齋先生講義雖為同門生不必許見聞矣 刑部大輔源幸和 (F13-12)

16 淺見先生小学大意講義打聞 写(五七丁) 大一冊

前者と同種。但し明倫第二君臣義まで、以下欠。校合書入あり。奥書に、「福田正徳先生所藏於江戸 佐野友正亨之」と。前表紙見返しの附箋に言ふ、

中村氏藏本小学大意口義一冊大意口義ヨリ題辭迄ヲ載ス此本ト校合スルニ大抵同シ甲辰四月廿三日忠陳識

是ト此本ト校合スルニ是モ亦大抵同シ 明治十一年十二月下旬 正勝記 (F13-13)

17 淺見先生小学内篇講義 写(六九丁) 半一冊

前掲二本と別種。大意序より立教の終りまで。(F13-14)

18 仁說問答師說 若林強齋筆記 弘化四年渡辺利行写(七五丁) 大一冊

綱齋編朱子の「仁說問答」(刊本)の講義筆記。綱齋の仁の解説を知る好文献。左の四種を収め、各々の講義年月を示せる奥書左の如し。

一、仁說問答師說(右講說始于元禄癸巳十月七日、而終于同年十一月七日)

二、仁說問答(右講說始于宝永丙戌四月十二日而終于同年同月廿四日)

三、又論仁說(右宝永庚寅十一月廿四日講說時、余在外爰居于湖山之阿、此日偶以有故在京、謁先

四、上綱齋先生書(此雖不志雜入于師說、而以其所書問于又論仁說講義一編紙尾以呈) 謹先生者、故今亦仍而不致改易云云十二月八日 若林進居拜)

右仁說問答師說者望楠軒遺藏即強齋先生之真蹟而今伝蔵于信尚館者也坂野氏嘗讀管山先生而模写之矣利行借得於坂野氏謹写之 弘化四丁未四月下流 渡辺利行 (F13-232)

19 綱齋仁說問答筆記 若林進居(強齋筆記) 明治四年齋藤貞二郎写(五〇丁) 半一冊

前者の(一)「仁說問答」(二)「又論仁說」を収む。「上総壹場楨治郎主」の印あり。奥書に、

右綱齋先生仁說問答講義請原本於為齋朽木翁原本出於湯敷利真行氏写長原本既有誤字亦闕有疑者依然因旧而已于延明治辛未仲秋八月上流写了齋藤貞識 (ZB-185)

20 仁說問答講義 若林強齋筆記 写(九丁) 半一冊

前者の(一)「又論仁說」及び(二)「上綱齋先生書」のみを収む。奥書に、

享保戊申之卷二月中旬自平瀬子借覽因購写一通以備参考云 (以下朱筆) 三月晦一校了

明治丙戌三月借読令子亮騰写 悔庵主人 (F13-17)

21 洪範師說 若林強齋筆録 写(三六丁) 半一冊

綱齋の洪範の講義を若林強齋が筆録せるもの。末に「書洪範師說後」なる正徳五年七月甲辰の強齋の漢文の跋あり。深田香実所持本。

(本文朱筆) 此一冊伯母 清教院君所騰写也 嘉永二年己酉十一月 深田正韶識 (朱筆)

(跋の次の奥書) 此一紙覽政年間予之所筆也 正韶識 (朱筆) (F13-10)

22 社會法師說 若林強齋筆録 昭和八年本所影写(五四丁) 大一冊

兩韵便覽	(廣文韻府附韻院覽) 大發口語傳(佛)編 卷大任(私覽)校 文化七刊	一冊	五三	五號	泰山集	四卷 谷重遠(泰山) 明治四三刊(活)	三冊	五三	五號
(三) 總集					水竹文集	(海山手鈔本) 二卷 尾藤水竹先生詩一卷 附 尾藤博高(水竹) 寫	一冊	五三	五號
○飛鸞詩選	非卷 七類 德辨 一卷	二冊	五三	六號	正庵文稿	一卷、王學謙(正庵) 一卷 生田中幸(正庵) 昭和一二刊	二冊	五三	六號
博桑名賢文集	林道五 林森 總編 元祿二二刊	六冊	五三	六號	惺窩文集	五卷 尾藤高先生行狀一卷 當岡 鐵齋(惺窩) 撰 林道勝(惺窩) 編 (惺窩) 寄之同編 寬永四序刊(總) 承應三刊	六冊	五三	六號
(四) 別集					青綵書院全集	池田將登(青院) 明治四二一六正二刊(活)	三冊	五三	六號
愛日樓文	佐藤相(愛日) 文政二二序刊	四冊	五三	六號	第二編 肄業徐稿一、續一、草葉詩集一、鳴鶴和集一				
○一電詩稿	二卷 海濱(一電) 昭和八刊(活)	二冊	五三	七號	第三編上 草葉文集一				
韻藏錄	(甘雨亭叢書本) 佐藤博方 刊本	一冊	五三	八號	第三編下 草葉詩文一、草葉文集拾遺一、伯我遺稿一				
鶴梁文鈔	明長(鶴梁) 撰 林非玄編 芳村正某校	二冊	五三	八號	○潛菴遺稿	三卷 森日仲(潛菴) 明治三二刊(活)	三冊	五三	八號
○偶記詩草	(順水手鈔本) 月田強(順水) 寫	一冊	五三	九號	○潛庵先生偶筆	(潛庵遺稿) (海山手鈔本) 一卷 附徐非一、卷 森日仲(潛菴) 寫	一冊	五三	九號
惟堂遺文	二卷 松崎(惟堂) 明治三四刊(活)	二冊	五三	九號	靜寄軒文集	二卷(卷八十二二兩)	三冊	五三	九號
行春詩州	六卷 元貞 文政四 寫	一冊	五三	十號	靜寄餘筆	(明治遺稿叢書本) (靜寄軒附錄卷三四)	二冊	五三	十號
穀堂遺稿抄	古賀(穀堂) 撰 天保一五刊(活) 卷八卷	四冊	五三	十號	精里集抄	初集抄三卷、二集抄二卷 古賀(精里) 文政五刊	一冊	五三	十號
棧雲峽雨詩草	竹添進二郎(井井) 明治二二刊	一冊	五三	十一號	精里二集抄	古賀(精里) 文化一五刊	二冊	五三	十一號
○時務六策	池田(時務) 寫	一冊	五三	十二號	頤水先生遺書	二卷 師本(頤水) 撰 岡田(頤水) 安部編 大正七 刊(漢口日報社) 守得堂(頤水) 版	六冊	五三	十二號
○自明軒遺稿	林久中(自明) 嘉永三三刊	一冊	五三	十三號	第一冊 卷二、二 詩				
春水遺稿	一、二卷、別錄三卷、別錄附尾一卷、附錄一卷	八冊	五三	十三號	第二冊 卷三、四 詩				
○松浦詩集	三卷 豐元(松浦) 享保三三序刊	三冊	五三	十三號	第三冊 卷五、六 文				

大學章句師說外題	淺見綱齋(安正) 講 亨 ②	半四	四號	五	同	若林(安正) 講 小野鶴山(通思) 編定	大二	四號	五
大學伝五章講義	淺見綱齋(安正) 元禄二二年講 大月殿著	大	一號	六	同	存序註文 同 同 亨 ④	半	一號	六
同	同 同 亨	大	一號	七	大學經文口義	(潤井忠實(大本) 若林強齋(進居 享保三	大	一號	七
同	淺見綱齋(安正) 元禄二二年講 大月殿著	大	一號	六	大學師說外題	存序註文 (若林強齋(進居 享保三年) 講	半	二號	六
同	同 同 亨	大	一號	五	大學經文(口義)	(大學經文(口義) 若林強齋(進居 享保三年)	大	一號	七
大學章句新疏	山口(菅山) 說書人本二卷 室蘭集(貞應) 刊	大	二號	五	大學章句師說	存序註文 若林強齋(進居) 講 山口(菅山) 安	大	二號	六
大學伝首章克明德講義外題	淺見綱齋(安正) 享保五七年講 若林	大	一號	三	同	(大學經文(口義) 潤井忠實(大本) 存序 若林	大	一號	九
同	(大學克明德講義) 同 同 亨	大	一號	五	大學(經文)師說	若林強齋(進居) 講 岡見(室蘭) 亨 ⑥	大	一號	五
大學忠信筆記外題	(大學忠信(貞應) 淺見綱齋(安正) 亨	大	一號	三	大學序講義外題	若林強齋(進居) 講 淺見(室蘭) 亨 ⑥	半	一號	五
大學物說誠心履義	淺見綱齋(安正) 享保三三刊 ④①⑥⑦	大	一號	六	大學師說外題	若林強齋(進居) 講 安正(室蘭) 亨 ⑥	大	一號	五
大學物說講義	淺見綱齋(安正) 講 亨	大	一號	六	大學筆記	講(大學師說) 天明三、六年西原(室蘭) 亨 ⑥	半	四號	五
批大學辨斷	御(安正) 元禄一〇刊(京) 萬曆(室蘭)	大	一號	三〇	大學講義外題	亨 ⑥	半	四號	五
知止能得考說・三綱八目考說	淺見綱齋(安正) 編 刊 ④⑥	大	一號	三	大學講義外題	西原(室蘭) 亨 ⑥	大	三號	六
又	同 同 亨	大	一號	三	蘭齋先生大學口義	(彩田) 蘭齋(安永) 亨 講 菅原(室蘭) 亨 ⑥	半	一號	六
辨大學非孔氏之遺書辨	淺見綱齋(安正) 元禄二二刊 ③⑥⑦	大	一號	三	大學經文己卯以后所聞外題	山口(菅山) (重明) 講 山口(菅山) 亨 ⑥	半	一號	五
又	姓名考(上) 合編 ④⑥⑦	大	一號	五	同	安正(室蘭) 亨 ⑥	半	一號	五
大學明德說	(淺見綱齋(安正) 享保五年講 亨 ⑥⑦	大	一號	三	同	同 同 亨 ②	半	一號	五
答山科教安論誠意書	論(大學) 亨 ⑥⑦	大	一號	三	蘭齋先生大學筆記(支) 末 大(室蘭) 亨 ⑥	半	一號	五	
同	淺見綱齋(安正) 亨 ⑥⑦	大	一號	三	復齋(大學) 經文講義外題	山本(復齋) 亨	半	一號	五
同	(姓名) 亨 ⑥⑦	大	一號	三	生(大學) 本文筆記外題	亨	半	一號	五
大學筆記	(大學師說) (三毛(室蘭) 亨 ④⑦	半	三號	六	大學紀聞略說	山口(菅山) (室蘭) 亨 ⑥	大	一號	五
大學章句師說	(若林強齋(進居) 講 亨 ①	大	二號	五	大學三綱領講義	西原(室蘭) 亨 ⑥	大	一號	五
同	同 亨 ④⑦	半	一號	五	大學三綱領八條目歌	(沖漢) 亨 ⑥⑦	大	一號	七
同	同 亨 ④⑥	半	五號	五	大學或問敬說講義	(淺見綱齋(安正) 講 亨 ⑥⑦	大	一號	五